



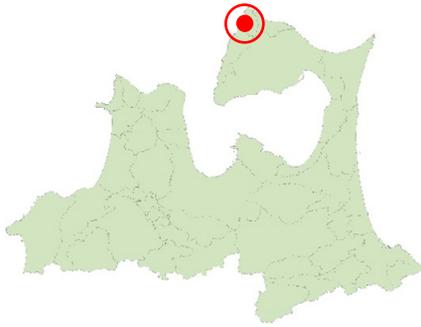
地元漁師が取り組む藻場再生

奥戸地区藻場保全の会

地域の特徴

奥戸地区は、青森県の下北半島の先端に位置し、本州最北端の大間町にある。その中でも奥戸地区は半島の西側に位置する。

地区は、津軽海峡に面すものの、海域の潮流がそれほど速くない。漁業は、コンブ漁やウニ漁の他に、マグロやタイ、ヒラメの一本釣り、イカ釣り、刺し網、タコカゴ、タコいさり、モズク、ナマコ、アワビなど様々な漁業が行われている。



ムラサキウニをカゴにより採取する。移植は、その採取したウニを、浅場（5～10m）に繁茂する海藻（ツルアラメ等）の生育場に移植し、身入りを良くする。

活動実績と課題

コンブ場でキタムラサキウニの除去を実施した結果、ウニの生息密度は大幅に減少した。また、海藻類の被度も増加傾向にある。ただし、その被度には年変動がみられ、藻場としては未だ不安定である。今後も、継続し、安定した藻場の形成を目指す必要がある。

除去したウニの移植については、身入りの改善が認められ、1ヶ月程度で漁獲対象となっている。

その他の効果としては、定量的なデータではないが、サザエの漁獲量に増加傾向がみてとれるようになってきた。また、他の藻食系の貝類であるナンコウガイ（ヒラサザエ）においても増加していると、浜で声が聞かれる。

コンブ場の現状

地区の沿岸には、コンブ場やツルアラメ等混生藻場が広がっている。しかし、平成10年頃からコンブ場で磯焼けがみられるようになり、コンブの漁獲量が減少し始めた。磯焼けの原因は、主にキタムラサキウニによる食害の影響と考えられた。そこで、当地区の漁業者が自主的に藻場の保全活動を始めた。活動は、コンブ場におけるウニの除去とそのウニの移植で、現在の活動とほぼ同じ手順で行われた。ただし、この活動は、漁の合間に自主的に行う程度であったため、その効果は把握されていない。また、当時はコンブ場の雑海藻の駆除として、チェーン引きによる下草等の間引きも行われていた。

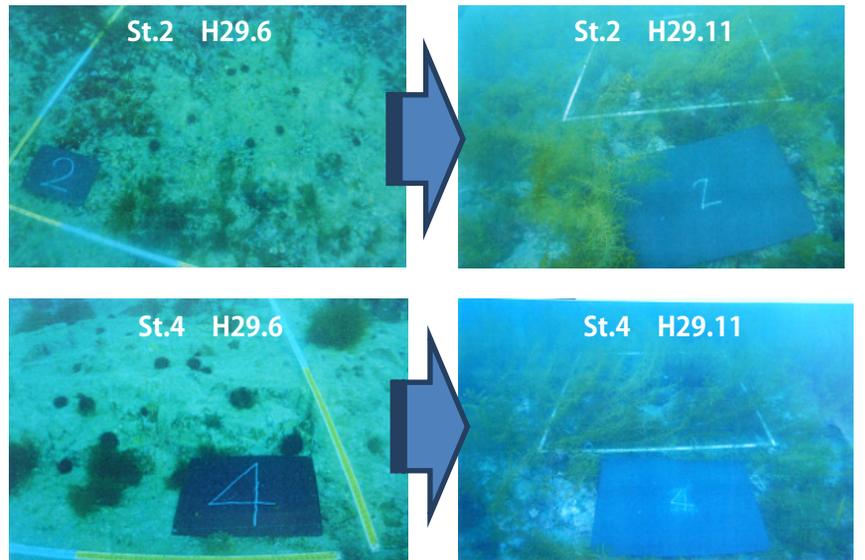
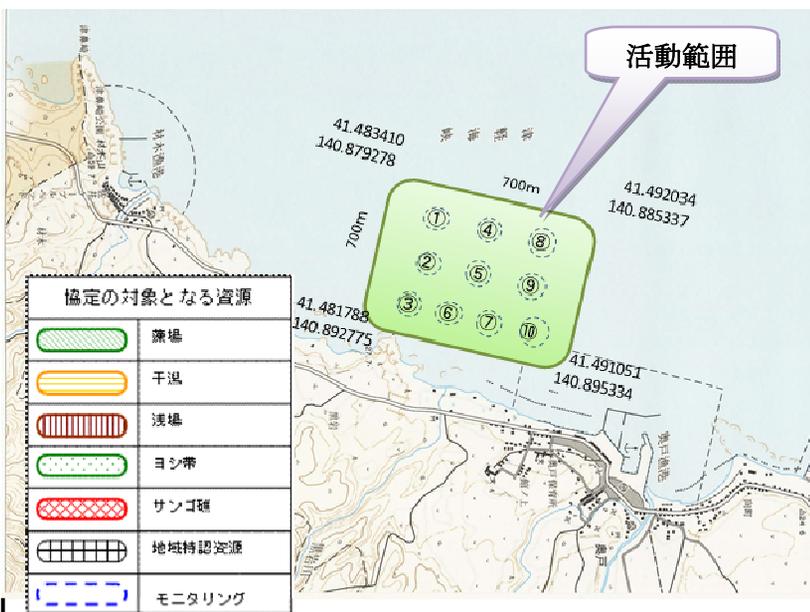


移植後（身入り改善）

モニタリング結果の推移

年度	海藻被度 (平均)	ウニ密度 (平均)
平成28年度	14.8	37.3
平成29年度	50.0	6.7

活動方針と取り組み



今後の方針

当該組織の活動の目標は「コンブ場の再生・維持」で、目的はそれによる海域の基礎生産及び漁業資源等の回復・維持である。活動の方針は、磯焼けの原因であるキタムラサキウニを減少させることにあるが、単に食害生物として駆除するのではなく、有用な資源として活用する方法を図ることとした。

主な活動内容は、ウニの除去とそのウニの適地への移植である。

ウニの除去は、マコンブが生育する水深15～20mで、高密度のキタ

ムラサキウニを浅場の藻場に移植したことによって、そのウニの身入りが改善した。この効果は、漁家経営の安定化の一助になっており、引き続き活動を展開していく。

一方、コンブ場の回復については、磯焼け区域からウニを除去し、その生息密度を低下させたことから、一定の成果は得られた。しかし、コンブの生産量は年によって大きく変動することから、藻場の維持保全には継続した活動が不可欠であると考えている。